慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私の略歴；主要業績表
Sub Title	Brief personal history and selected list of publications
Author	太田, 昭子(Ohta, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2022
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.143 (2022. 2) ,p.309- 317
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	辻幸夫先生・武藤浩史先生・太田昭子先生・ジェームズ・レイサイド先生退職記念特集号 図削除
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000143-0309

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の略歴

太　田　昭　子

私は 1956 年に父の転勤先で生まれた。だが生後 1 歳から東京住まいとなり，「生まれ故郷」の記憶は残っていない。銀行員の父は，国内外の転勤が多く，それに伴って私も転校を何回か経験した。

4 歳から 7 歳になる少し前まで，香港に住んだのが最初の海外生活である。それまで自宅から徒歩で幼稚園に通い，同年配の子供達と伸び伸びと遊んでいた日常生活が一変した。イギリス系の幼稚園・小学校に通い，通学は自家用車での送り迎えに頼る生活になった。亜熱帯の気候が体に合わず，健康優良児だった私は，体調をくずしがちな子供になってしまった。ただ，当時イギリス領だった香港で外国文化に初めて触れ，今までとは異なる世界が広がった。君が代の前にイギリス国歌の God Save the Queen を歌うようになるなど，イギリス文化の一部が身近な存在となっていった。

当時の香港では中国人の居住地と西洋人の居住地が隔てられており，中国人居住区は衛生的な環境とは言えなかったが，そこには独特なエネルギーが満ちているように感じられた。その象徴とも言えるのが，中国人居住区の「におい」である。後年，イギリスで知り合った Robert Bickers 氏（植民地史研究）と，「においの記憶」談義で盛り上がったのを思い出す。

知人を訪れた母を待つ間，白人専用住宅地内の砂場で遊んでいて，白人男児

2 人に急襲された記憶も鮮明だ。英語で何やら叫びながら砂礫を容赦なく投げつけられたのだが，日本で接したガキ大将とは明らかに異なる，憎悪と侮蔑のこもった彼らの表情は，未だに脳裏に焼きついている。そして子供心に，香港での日本人の立ち位置が何だか不思議なものに感じられ，ある種の居心地の悪さと違和感を覚えたものである。幼稚園児の私には，植民地の仕組みなど理解できなかったが，香港の植民地文化にまつわる様々な記憶は，その後，研究者としての私の立ち位置に深く関わっている。

帰国後は公立小学校に通ったが，周囲から受けた「よそ者」扱いに一苦労した。子供同士より，「欧米諸国帰り」と「それ以外」を分け隔てするような大人たちへの接し方が厄介だったが，今となってはそれも貴重な経験である。

中学入学後，父のロンドン転勤に伴い，雙葉中学からカトリック系の学校に編入学した。学校ではエッセーの課題が次々に出され，私は息も絶え絶えな状態に陥った。英文学の授業では，ディケンズの小説 *Nicholas Nickleby* を読まねばならず，あまりの分厚さに気が遠くなりそうになった。ちょうどその頃読んでいた『吾輩は猫である』の，迷亭の与太話の中に，「ニコラス・ニックルベー」を発見して涙が出そうになったのを思い出す。その後イギリスでは，漱石を始め，入手できる日本の小説を読み漁った。イギリスでの生活は，イギリス文化との出会いだけでなく，日本文化を見直すきっかけも与えてくれたのである。英語力が少しついてくると，観劇や，無料で入館できる美術館・博物館めぐりも楽しむようになった。頻発するストライキに辟易することもあったが，多感な中学時代をイギリスで過ごすことができたのは幸せな経験だった。

中学 3 年生の秋に，帰国子女を積極的に受け入れていた桐朋女子中学に編入し，そのまま桐朋女子高校を卒業した。（この間，父は福島に転勤になったが，高校の居心地の良さから，中学 3 年間に 3 つの学校を経験した転校疲れを口実に，私は東京を離れなかった。）桐朋には音楽や演劇を志す人も多く，またプレゼンテーションやディカッションなどの授業形態が盛んに行なわれており，ユニークな発想の先生や友人たちから大いに刺激を受けた。

1975 年，東京大学文科三類入学。専門課程では少人数の教養学科に進学し，主専攻でイギリス地域研究，副専攻で国際関係論を学んだ。この間，ロンドン

大学に留学し歴史を学ぶ機会も得た。教養学科の地域研究課程では，人文科学・社会科学両方のアプローチから対象地域を学び，勉強量は多かったが，充実した学生生活だった。この時代の経験が，後年，慶應で地域文化論の授業を立ち上げる際，役立つことになった。また，学習指導を務めていた時，当時の朝吹日吉主任の肝いりで副専攻制が発足したのも，何かのご縁かも知れない。

教養学科では当初，イギリスとアフリカ植民地を中心とするイギリス連邦論に関心を抱いていたが，卒論作成の過程で関心の所在が次第に東へ移動し，イギリスと東アジア，アヘン戦争と英中関係史，そして幕末維新期の日英関係史に行きついてしまった。それには芳賀徹先生の演習で岩倉使節団と『米欧回覧実記』に出会ったことが大きく影響している。留学で大学卒業が遅れたこともあり，就職か大学院進学か少し迷ったが，卒業論文を書いているうちに面白くなってしまい，大学院進学を選択した。

1981 年，東京大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化課程に進学。大学院では芳賀先生に福澤諭吉『文明論之概略』の研究を強く勧められたが，福澤研究の本場である慶應義塾の存在を思うと自信が持てず，別のテーマを選んでしまった。それから 40 年後の今，私は慶應義塾大学に 30 年以上奉職し，福澤関係の論文まで発表している。これも不思議な縁（えにし）である。

1986 年，古巣の教養学科イギリス科の助手に採用された。テニュアのある職位ではなかったが，学科の運営や卒論指導を補佐する機会を与えられ，非常勤講師をしていた横浜国立大学で，当時慶應の法学部教授でいらした海野厚先生の知遇を得た。それがご縁で，1989 年に慶應義塾大学法学部に就職。諸般の事情で 10 月 1 日からの任用となった。

1989 年 10 月，専任講師に就任。その後，1994 年 4 月，助教授に昇任。2001 年 4 月，教授に昇任。そして今日に至っている。右も左もわからないまま法学部専任教員の生活が始まったが，戸惑うことの連続で，赤面の至りの失敗も数知れない。だがそれから 30 年以上を慶應で過ごし，専任教員としての卒業を迎えようとしているのは，ひとえに慶應義塾で皆様に温かく見守っていただいたおかげと感謝している。教育・公務・研究活動の全てにおいて，様々な方々から貴重なお教えと温かいご配慮を賜った。この場を借りて心から御礼申し上

げたい。

英語部会の先生方からは折に触れ教育面で貴重なご助言をいただいた。大学院時代に，大学で英語を教える基礎訓練を受けてはいたものの，大学 1・2 年次の英語教育がかなりオーソドックスだったため，改善の余地があった。目から鱗の発想や手法に刺激を受け，学生たちのニーズにこたえられる授業にチューンアップすることができたのではないかと思う。

10 月入社のおかげで，着任後まもなく入試業務に動員された。初めてペアを組んだのが岩谷十郎先生だったのも何かのご縁のように感じている。入試関連の仕事はかなり頻繁に回ってきたが，三田や日吉の様々な分野や年齢層の先生方との共同作業を通して視野を広げることができた。

折々の「お年頃」に回ってきた公務でご一緒した先生方にも感謝している。「究極の凸凹コンビ」と言われた武藤浩史先生との学習指導業務も楽しい思い出となっている。歴代の学部長秘書の皆様にはことのほかお世話になったが，現在の学部長秘書の高木信子さんは，私が学習指導だった当時，日吉学事センター（現・学生部）の法学部担当でいらした。

研究面では，1996 年からプリンストン大学，1997 年からケンブリッジ大学で，それぞれ 1 年間，Visiting Fellow として研究交流の機会を与えられた。ケンブリッジ大学クレア・ホール（Clare Hall）で，福澤研究センターとご縁の深い，民俗学者のカーメン・ブラッカー先生から学んだことは計り知れない。コロナ禍で以前のように気軽にイギリス訪問ができなくなったが，ケンブリッジとのつながりは未だに続いており，私にとって貴重な財産となっている。また福澤研究センターの仕事を通して学んだことも多く，公務と研究が密接にリンクしている慶應義塾のあり方に感謝している。

学生たちから教わったことも数知れない。オンライン授業運営のノウハウはもとより，専門科目でも，新鮮な発想や解釈に，はっとさせられたことが少なくなかった。

このように記していくと，これまで実に数多くのご縁と出会いを通して，自分が形づくられてきたことに改めて気づかされる。在職期間の終盤は，東日本大震災やパンデミックなどが発生し，未だに問題が解決したとは言えない状況

のまま，「卒業」となりそうである。今後，どのような世の中になるのかも不透明だが，今に至る諸々のご縁への感謝を忘れず，これからも歩んでいきたいと願っている。そして，法学部の皆様のご健康とご発展を，心よりお祈りしている。

主要業績表

1）　主要論文

1.1　雑誌論文

「日本人の見た西洋・西洋人の見た日本―久米邦武とオールコック」
（『比較文學研究』，東大比較文学会，第 40 号，126-137 頁，1981 年 11 月）

「ロバート・ルイス・スティーヴンスンと吉田松陰―'Yoshida Torajiro' 再考―」
（『教養学科紀要』，東京大学，第 19 号，49-65 頁，1987 年 3 月）

「外交官の肖像―サー・ラザフォード・オールコック―」
（『外交フォーラム』，第 2 巻 3 号，70-75 頁，都市出版，1989 年 3 月）

「イタリアにおける岩倉使節団―現地新聞報道の分析―」
（『比較文化研究』，東京大学，第 27 号，41-68 頁，1989 年 3 月）

「忠臣蔵の世界―英訳の変容過程―」
（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 88 号，1-28 頁，1991 年 3 月）

「シカゴにおける岩倉使節団」
（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 96 号，73-90 頁，1994 年 3 月）

「諷刺画の中の日本像―1873 年イタリア諷刺雑誌に描かれた日本―」
（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 98 号，1-13 頁，1994 年 11 月）

「サー・ラザフォード・オールコック『大君の都』」
（『国文学解釈と鑑賞』766，60 巻第 3 号，82-89 頁，至文堂，1995 年 3 月）

「岩倉使節団とイタリア」
（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 102 号，25-53 頁，1996 年 3 月）

'The Iwakura Mission in Britain: their observations on education and Victorian society'
（London School of Economics, International Studies Discussion Paper No. IS/98/349, March 1998）, pp. 13-24.

'The Iwakura Mission in Britain', in *The Iwakura Mission to Britain*, （DURHAM EAST ASIAN PAPERS 13, Department of East Asian Studies, University of Durham, 2000）, pp. 24-35.

'The Japanese Encounters with Victorian Britain: the observations and analysis of British society in the 1860s and early 1870s'.

（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 123 号，55-87 頁，2005 年 2 月）

「幕末明治初期の近代日本における「人種」論―久米邦武の「人種」論を中心に―」

（『近代日本研究』，慶應義塾福沢研究センター，第 25 巻，125-149 頁，2008 年）

「岩倉使節団とイギリスの教育―使節団の教育機関視察をめぐる考察―」

（『法学研究』，慶應義塾大学法学研究会，第 82 巻，141-173 頁，2009 年 1 月）

「岩倉使節団―世界一周の旅とイギリス産業社会の考察―」

（『交詢雑誌』第 540 号，40–65 頁，2010 年 5 月）

「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（1）」

（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 135 号，43–69 頁，2014 年）

「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（2）」

（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 136 号，47–63 頁，2015 年）

「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（3）」

（『教養論叢』，慶應義塾大学法学研究会，第 139 号，25–49 頁，2018 年）

「岩倉使節団と模擬裁判」（コラム執筆）

（【ケース研究】335 号「アンテナ」，2019 年 6 月 25 日）

1.2　共著（書籍所収の論文）

「サー・ラザフォード・オールコック『大君の都』」

（佐伯彰一・芳賀徹編『外国人による日本論の名著』10-17 頁，中央公論社，1987 年 3 月）

「『米欧回覧実記』を読む」

（大澤吉博編『テキストの発見』，99-108 頁，中央公論社，1994 年 10 月）

「岩倉使節団とシカゴ」

（田中彰編『近代日本の内と外』，2-38 頁，吉川弘文館，1999 年 11 月）

'Nakamura Masanao（Keiu）, 1832-91: translator into Japanese of Samuel Smiles' *Self-Help*' in Sir Hugh Cortazzi ed., *Britain & Japan Biographical Portraits*, pp. 215-223, Japan Society Publications, 2002.

「オールコック『大君の都』」

（岡本さえ編『アジアの比較文化』260-262 頁，科学書院，2003 年 3 月）

「岩倉使節団のイタリア訪問」

（芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』，148-191 頁，思文閣出版，2003 年 7 月）

1.3　単著

法研叢書より 2022 年春に刊行予定

2）翻　訳

（英訳）

IMAI Hiroshi 'British Influence on Modern Japanese Historiography', SAECLUM, XXXVIII, Heft 1, pp.99-112, 1987

（日本語訳）

遠山茂樹編『天皇と華族』，日本近代思想大系第 2 巻所収文書（岩波書店，1988 年 5 月）

田中彰編『開国』，日本近代思想大系第 1 巻所収ペリー文書（岩波書店，1991 年 1 月）

共にウィリアム・スティール氏との共訳。

シドニー・ブラウン「アメリカ西部の岩倉使節団」

（田中彰編『「米欧回覧実記」の学際的研究』所収，69-96 頁，北海道大学出版会，1993 年 3 月）

ジュリア・エドワーズ『戦場の女性特派員』，平凡社，1994 年 1 月

ミシェル・グリーン『地の果ての夢タンジール』，河出書房新社，1994 年 5 月

新井潤美他との共訳（プロローグ・エピローグ・第 18～21 章担当）

オリヴ・チェックランド／杉山忠平・玉置紀夫監訳『明治日本とイギリス』法政大学出版局，1996 年 4 月（第 7・8・9 章担当）

マリウス・ジャンセン「アメリカにおける岩倉使節団」
（芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』所収，17-46 頁，思文閣出版，2003 年 7 月）

シドニー・ブラウン「岩倉使節団における木戸孝允の役割」
（芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』所収，195-229 頁，思文閣出版，2003 年 7 月）

3）　項目執筆と学会口頭発表・講演など：多数につき省略